

日本の伝統技術を輸出 帯で世界を結びたい！



右/帯のクッション。桐生織の帯使用。 左上/帯生地を使用した愛犬用の首輪 左下/キーホルダー

和服の帯などを愛犬の首輪のようにカタチを変えて輸出することで、「すぐれた日本の伝統文化を、改めて海外の人たちに知ってもらいたい」というラブジャパンブランドがこのほど設立された。

代表である鈴木衣里子さんに、設立のきっかけや、これからの展望について話を聞いた。

「昨年、経済産業省クールジャパンを応援する会に呼んでいただいたことをきっかけに、日本文化を世界に発信するということに興味を持ちました。アメリカに住む友人にその会のことを話すと、日本の技術を象徴するような生地を探して欲しいと頼まれました」という。続けて「経済産業省の方から、桐生にある優良工場3社を紹介してもらいました。NASAに技術を提供しているような優れた工場で、国内に驚くような

技術力のある工場があることを知って感動しました。こうした日本の優れた技術、日本の素晴らしい文化を、世界に発信していくことが、今の日本にはとても重要なことだと感じて活動を始めたのです。」

帯が和服の帯であつたら、どんなに素晴らしいものであつても使いこなせない人が海外にはたくさんいる。それならば、帯地を使って、もっと身近で使える物をつくれれば、その織物の素晴らしさを見て触れて、体感できると思いましたと鈴木さんはいう。

ほかにも日本が世界に誇る超撥水技術。「世界でもトップレベルのその技術を使った製品を世界に広めていきたいと思っています。」水泳選手が着用してタイムが伸びた！という水着を開発した工場にも協力してもらっています」と鈴木さんは

述べる。絶滅の危機にあるともいわれる織物工場をまわり、そうした工場をつくる生地を使い製品にすることも考えているという。

「東北の石巻には、遠藤伸一さんという木工作家がいます。昨年の津波でお子様3人を亡くされました。とても温かい人柄の素晴らしい方です。その方の木工と帯とのコラボ作品を作り、世界に広めていきたいと考えています。」

こうして鈴木さんは、国内の技術者や工房などをまわりながら、輸出に詳しい企業や海外に拠点を持つ協力の提携先を探し、ラブジャパンブランドの拡大に務めている。

文 松田 明(株式会社フォーシスターズ)

Love Japan
Growing tomorrow ©eri.kamo



代表・鈴木衣里子 Eriko Suzuki

アートディレクター&グラフィックデザイナー。軽井沢を拠点に、イベントのロゴやコンサート等のチラシ、ポスター、パンフレットのデザインを手がける。主な作品に軽井沢国際カーリング大会のチラシ、ポスター、プログラム、グッズのデザイン、軽井沢アートイベントのロゴやチラシデザイン、コンサートでは、ライナーキュッヒルのチラシデザインほか数多い。大手企業の社内報等の編集、デザイン。2010年には、羽田国際空港第2ターミナルのコンコース、ロビーから見える庭園の最終的な植栽イメージ図を描いた。

ラブジャパンブランド公式サイト
www.lovejapanbrand.com